

緩和ケア病棟

さとわ

No.9

緩和ケア病棟「^{さとわ}郷和」理念

1. 豊かな自然環境の中で、その人の気持ちに添ってケアするとともにその家族を支援します。
2. その人のもつ苦痛の緩和につとめます。
3. その人の希望に添って自宅での生活を支援します。

郷和、この1年

施設長 桜井 金三

2011年8月で病棟開設10周年を迎えることができました。郷和の歴史の中の2011年は、メモリアルイヤーとなりますが、3月11日の大震災・福島原発事故をはじめ、7月の水害など、大勢の方の「死」が、しかも突然の死が目の前に起こり、別の意味で記憶に残る年となりました。これまでになく生と死について、多くの人々が深く考える年になったと思われ、今後緩和ケアへの関心がより一層高まるものと考えております。

この10年、多くの職員・ボランティアの皆様にご活躍いただき、新潟県の緩和医療において確固たる地位を築くことができました。決して平たんな道のりではなく、一歩前進二歩後退ということも珍しくない日々の連続でしたが、スタッフのチーム力と周囲の皆様のご協力を頂きどうにか今日の日を迎えました。ご遺族の満足度調査などでも合格点の評価を頂いておりますので、基礎としての10年は、誇りに思っており、よいと考えております。

これからの10年は、さらなる飛躍をめざし、ケアを一層深化させ充実させていかねばなりません。スタッフ皆で、その想いを新たにしているところです。しかしながら初めから課題が山積みです。現在の喫緊の問題は医師の増員です。本年年頭から常勤医が一人となりました。週二回は新潟大学名誉教授・武藤輝一先生に応援いただいておりますが、医師の充足が最重要課題になっております。昨年来課題としてきた「(医師以外の)スタッフの充実」、「入院待機期間の短縮」、「地域の医療機関・介護施設との連携」、「スタッフのストレス対策」なども医師の増員なくしては、路半ばでの停滞となってしまいます。

全国の心ある医師に参加を呼び掛けたいと思います。

緩和ケア病棟「郷和」医師 武藤 輝一

私は一年前から「郷和」で施設長・桜井金三先生のお手伝いのパート医師として勤めております。私はかつてがん患者さんの主治医となり、その手術を執刀した外科医ではありますが、多少なりとお役に立つところがあればと思い、勤めさせて頂いております。最近の当病棟「郷和」の外部評価のことや、私が感じている2～3の事について申しあげたいと思います。

過日、当緩和ケア病棟は日本ホスピス緩和ケア協会による遺族調査に参加しました。遺族の方の評価では、改善するところが少しあるという結果でした。それでも比較的優れた施設であったと評価されたようです。今後指摘された問題点を検討しより良く改善していくこととなります。

病棟では毎日午後には医師、看護師が集まり、あるいは医師、看護師に他部門の職種の方も加わり、協議が必要とされている患者さんについて、あるいは病棟運営について話し合うことにしています。この時、診療、看護、介護のほかに話題になるのは患者さんに対する家族の方々の意見の違いであります。患者さんが家族の方々にはっきり物を言えない場合も少なくありません。医師や看護師が家族の方々の種々の異なった意見や要望に困惑することがないように纏まった意見や要望を寄せて欲しいのであります。

過日、第673回新潟医学会で“緩和医療と地域医療”と題するシンポジウムが開催されました。在宅緩和ケアの話が中心となりました、例えば一人の在宅する患者さんをめぐって、関与する医師相互間の関連は良く行くとしても、医師、看護師、介護士、ケアマネジャー等の方々の十分な連携が必要のようです。簡単に解決できる問題ではないですが、在宅緩和ケアを担当しようという医師、看護師、介護士の方々(とくに看護師、介護士の方々)は一週間位でも緩和ケア病棟で勤務して、お互いになすべき事の関連を認識しておくのはどうかと思った次第です。

私事ですが、45年前、思師・堺哲郎先生(当時、新潟大学医学部第一外科教授)は私(当時、講師)に「武藤君、私は定年退職後、末期がん患者さんだけを受け入れる病院を作り、患者さんの面倒を見たいよ」と強い希望を持って申されました。国内ではホスピスの名称が出始めた頃で、まだ緩和ケア病棟等の名称は聞かれませんでした。然し堺先生は58歳でスキルス胃がん(注、進行の早いタイプ)で亡くなり、先生の思いは叶いませんでした。悲しい残念な思い出です。

当緩和ケア病棟も開設10年に達し、入院申し込みの患者さんが待機している状態です。職員一同、患者さんの事を思い、日夜休みなく勤めているというのが実情です。



「10周年を迎えて」

緩和ケア病棟「郷和」師長 大室 信子

豊かな自然に囲まれた緩和ケア病棟「郷和」が、10周年を迎えました。

平成13年8月1日開設以来、数多くの患者様を迎えることができました。その間職員も、質の高いケアを目指し努力してきましたが、思いとは裏腹に、ケアを受け入れてもらえなかったり、お叱りを受けることもありました。そんななか、ある患者様が外に出たいと希望し、ベッドごと庭に出ると、目いっぱい笑顔でお礼を言ってくれたこと、どうしても一人でトイレに行きたいと言う患者様に、危険がない方法をと一緒に考え、満足できる方法を考えられたことなど、心温まる思い出もあります。また平成14年からボランティア教育を開始し、活動が始まりました。そして現在も多大な協力を頂いております。

施設の建物、環境は、患者様の心を癒し、また職員の心をも癒してくれました。開設当初から、医師は3人変わりました。看護師も入れ替わりましたが、現在は16人で緩和ケアナースとして頑張っています。また、その中の一人は、より質の高いケアを目指し、緩和ケア認定看護師の資格を取得して、患者様のケア、職員の教育に勤しんでいます。まだまだ患者様の思いに届かないところもありますが、多くの患者様と、そのご家族から学ばせていただき、周囲の支援を頂きながら、患者様とともに生きていけるよう努力し続けたいと思っております。

「緩和ケアが私に与えてくれたもの」

緩和ケア認定看護師 小池 宜子

一般病棟で忙しく働いていた頃の私にとって、検査や血圧測定、点滴などの処置が看護業務の大半を占めていました。いつも時間に追われ処置を無難にすばやくこなす事で頭がいっぱいでした。

そんな時、緩和ケア病棟に異動となりました。緩和ケア病棟では、本人や家族が希望しない事は行ないません。私は身ひとつで部屋に入る事ができませんでした。何もできない自分を知り愕然としました。私は何だったのだろうと。

緩和ケアとは、本人や家族の意志を尊重し、さまざまな苦しみを和らげて生きることを支えるケアです。看護の知識や技術だけではなく、チームケアを円滑に進めるため、また本人や家族のつらい思いや希望を引き出すためのコミュニケーション技術、豊かな感性や感受性をもつことなど、たくさんのことが求められます。それらを学んでいるうちに緩和ケア認定看護師の資格を取りました。

人は必ず死を迎えます。緩和ケア病棟と聞くと「死ぬところ」というイメージを持たれる人は大勢います。とても残念です。緩和ケア病棟は、生きて死を迎えるその瞬間まで、あなたがあなたらしく生きることを支えるところです。そして、たとえあなたが亡くなったとしても残された家族をも支えるところです。

私は緩和ケアと出会い、本人や家族と共に泣き、共に笑い、共に生きることを体験しています。看護を通して感動し、看護を通して成長させていただいています。学ぶ機会を与えてくれた事に感謝し、出会いに感謝し、四季に感謝し、生かされていることに感謝しています。

10周年 記念講演



10月1日(土)五泉市福祉会館にて大倉修吾氏を招いての10周年記念講演会が開催されました。当日は大勢の方にご参加いただき、大倉修吾氏の軽快なトークに笑い声がたえませんでした。

「郷和10周年を迎えて」

医事課 清野 聡子

緩和ケア病棟「郷和」は10周年を迎えました。10周年記念の講演会を無事終えて、私自身も改めて緩和ケア病棟について考える機会を頂きました。そのうえで世間の皆様には緩和ケア病棟がどのように映っているのだろうと……。緩和ケアという病棟が、未知の世界と思っている方も少なくありません。

いったいどんなところ？ どんなことをするの？
入院費用は高額になるのでは？

選択をするのはあくまでも患者様とご家族ですが、よりよい方向を選択できる情報を常々提供していかなければなりません。患者様とご家族が緩和ケア病棟についてアクセスしやすいように案内していくことや医療費の情報も気軽に入手できるよう工夫していくことが必

要であることに気づかされた次第です。

患者さんの治療や療養については、長期にわたっている方が多く見られます。高額療養費制度、傷病手当金、その他公的負担制度など多様な経済援助制度の情報提供も必須。

スタッフとして、患者様とその家族がどんな状況にあっても穏やかに温かく接することに心がけ、ともに癒しの空間を作り出していきたいと思います。これから先、更に緩和ケアの質が向上するよう一同一層努力してまいります。

「郷和」利用状況

(H. 22年4月～H. 23年3月)

入院患者数	133名
-------	------

一日平均入院利用者数	16.8名
------------	-------

平均病床利用率	83.9%
---------	-------

平均在院日数	50.5日
--------	-------

発行年月日 平成23年12月22日

編集・発行 南部郷厚生病院

緩和ケア病棟「郷和」

〒959-1704 新潟県五泉市愛宕甲2925-2

TEL (0250) 58-6111(代) FAX (0250) 58-7300